

オープンリサーチセンター整備事業（04-08年度）

文部科学省のオープン・リサーチ・センター整備事業（04～08年度）に採択された本学の研究プロジェクト「イノベーション・クラスター形成に向けた川崎都市政策への提言」は、川崎の可能性を探り、再構築のための具体的な政策提言を行っていくことを目的としている。今後、同時遠隔双方向システムにより、キャンパスと市を結んで、広く研究成果を公開していく予定。

川崎の可能性探る グローバル経済とイノベーション都市の条件



▲具体的目標テーマが次々に提起された
パネルディスカッション（1/29、川崎市産業
振興会館で）

大学院社会知性開発研究センター／都市政策研究センター主催（川崎市・神奈川新聞社など後援）のシンポジウム「グローバル経済とイノベーション都市の条件－川崎の可能性－」が1月29日、企業人、研究者、学生ら約100人が参加して川崎市の産業振興会館で開かれた。

当日は阿部孝夫川崎市長が、本プロジェクトへの期待を述べ、日高義博専修大学長は川崎市との連携をさらに深めたいとあいさつした。

基調講演で寺島実郎・（財）日本総合研究所理事長は交通体系に恵まれ、大学や先端技術の研究開発機関の連携がとりやすいといった川崎市のメリットを生かして、イノベーション・クラスターに連携していく必要性を述べた。

平尾光司経済学部教授（プロジェクト代表）が司会を務めたパネルディスカッションでは、植松了川崎市経済局長、原田誠司那須大学教授（川崎市産業振興財団副理事長）、山田長満（株）ケイエスピー代表取締役社長、寺澤則忠（財）日本経済研究所顧問、鶴田俊正本学名誉教授がそれぞれの立場から報告を行った後、「文化産業的な都市構築を」（寺澤氏）、「イノベーションの担い手は『人』。それにより地域が強化される」（鶴田氏）、「ベンチャー企業1000社創出を」（山田氏）といったさまざまな提言が続ぎ、白熱した討論が展開された。

神田・生田でも公開講座開催



シンポに続いて、「地域の再生・振興と産業クラスター」（2/2・神田キャンパス＝写真）、「アジアにおけるサイエンス・パークの展開」（2/3・生田キャンパス）、「欧米におけるイノベーション・クラスターの展開」（2/4・ケイエスピーホール）と連続して公開講

座が行われた。

企業価値創造のための管理会計の役割

大学院社会知性開発センター主催シンポ

大学院社会知性開発研究センター主催のシンポジウム「企業価値創造のための管理会計の役割」が12月18日、神田キャンパスで約150人が参加して開かれた。企業価値を創造するツールとして注目されているEVA(経済的付加価値)と、財務的・顧客の視点といった側面から、ビジョン・戦略を成功に導くバランスト・スコアカード(BSC)の理論について研究者が解説し、採用・導入している企業からの事例が報告された。シンポジウムではコーポレート・ガバナンスの視点からどのように考えるか、活発な議論が展開された。

講演者は次のとおり。

(1)コーポレート・ガバナンス=宮本光晴経済学部教授(2)EVAの理論と実務=田中隆雄青山学院大学教授/リクルートマネジメントソリューションズ・本合暁詩氏/花王IR部長・藤居勝也氏(3)BSCの理論と実務=小倉昇筑波大学教授/東京三菱銀行総合企画室・南雲岳彦氏/シャープシステムプロダクト副参事・林昌芳氏

「リスクに挑む」をテーマにエクステンションセンター公開講座

「リスクに挑む」をテーマにエクステンションセンター公開講座(日本商品先物振興協会共催)が1月27日、神田キャンパスで開催された。経営学部の特殊講義(リスク・マネジメント)担当の池本正純教授がコーディネーターを務め、日本銀行政策委員会審議委員の福間年勝氏=写真=の講演に126人が聞き入った。

三井物産で金融・財務畑を歩み、副社長としてリスク・危機管理を担当してきた福間氏は新興工業国が世界経済に与える影響やIT活用の差が企業経営力や業績の格差になっている状況を述べ、今後の戦略としてコーポレートガバナンスの確立、コンプライアンス、ディスクロージャーの徹底、現場主義と共に、リスクを適切に管理しながらリターンをあげていく攻めの経営姿勢の重要性を論じた。

寺尾教授翻訳『ねずみ狩り』

寺尾格経済学部教授が翻訳した『ねずみ狩り』(オーストリアのペーター・トゥーリー二原作)の日本公演が次の3会場で行われる。

◇福岡公演 ぽんプラザホール▽3月5日(土)▽同6日(日)◇北九州公演 スミックスE STA▽3月10日(木)~13日(日)◇東京公演 シアターX(カイ)▽4月15日(金)~17日(日)いずれも開演は19時30分(日曜のみ14時)

名古屋公演も予定されている。詳細はうずめ劇場WEBサイ

ト<http://www.uzume.org>で。

文学部のネット利用遠隔地授業を初体験

専大附属高校生



▲専大側の画面には付属高生の様子が



▲講演するラウド教授

専修大学附属高（東京杉並区）の生徒が文学部（生田キャンパス）とのネットワークを利用した遠隔地授業を昨年12月13日に初体験。スクリーンから来日中のレイン・ラウドヘルシンキ大学教授の講演を見聞き、日本文学文化専攻（以下日文専攻）の教員や学生と交歓した。

当日の参加者は今春、文学部に入学を希望する3年生を中心に生徒35人で、藤村富士男校長、今福義幸理事長ら教職員多数が授業の様子を見守った。

生田キャンパスから荒木敏夫文学部長があいさつし、日文専攻教員から各ゼミ紹介のあとラウド教授が「ヨーロッパの言語を通じた日本文学・文化研究」を講演した。バルト三国エストニア生まれの同教授の専門分野は、平安時代の古今和歌集と新古今和歌集。日本語のほか二十数カ国語を話す。講演では豊かな自然観を持つ日本文化の魅力を語り、外国語の勉強法、日本にはなじみの薄いエストニア文化についても触れ、生徒からの質問にも丁寧に答えていた。

板坂則子教授と参加した日文専攻学生8人との質疑応答も行われ、生徒たちの盛んな

質問に、専大の先輩たちは授業の取り組み方や学生生活について、ユーモアを交えながら熱心に答えた。

参加した笹谷麻衣さん（3年生）は「新鮮な体験だった。外国人から見た日本の文化はととも魅力的であるということを発見した」と感想を述べた。

またラウド教授は「日本のネット授業は技術的に進んでいると感じた。高校生と話が出来たのは貴重な体験」と語った。

【ニュース専修2005年2月号3面】